

[要旨]

占領下社会運動における「環境保護」フレーミングの可能性と課題 ——沖縄県国頭村伊部岳^{くにがみ いぶだけ}実弾射撃演習阻止闘争を事例に——

森 啓輔

第二次大戦後、米軍占領下において海兵隊北部訓練場が沖縄本島北部に位置する国頭村と東村に跨がり造られた。北部訓練場における海兵隊の訓練は、周辺集落の土地と人々をも動員しながら続けられてきており、そのためこれら地域は継続的に新たな基地建設に直面せざるを得ない状況にあった。だが、そこは同時に、対抗する住民運動が闘われてきた場所でもあった。なぜ運動は生じたのか。運動の「成功」にもかかわらず、なぜ基地建設は継続されたのか。そして、困難を抱えながらなぜ運動は対抗ヘゲモニー政治の担い手であり続けたのか。本論はこの系譜の嚆矢的出来事である伊部岳実弾射撃演習阻止闘争を対象に、米軍基地に抗する住民運動を社会学的視点、とりわけフレーミング分析の観点から考察する。「復帰」前夜の同時代において運動の背後には、いかなる力関係がひしめき合っていたのか。伊部岳闘争はこれまで、住民の視点や環境運動の視点から記述されてきたが、当時の占領下の法制度的状況という背景無しでは十全に考察することはできない。本論ではこれを踏まえ、占領下の伊部岳闘争がいかにして諸運動フレームを創り出し、それらを架橋・増幅させながら運動を展開したのかを、当時の文脈において環境保護のフレーミングが持つ可能性と課題を詳細に検討することで考察する。